

『日本における近代的定位の根源』

序論：憲法の不連続と日本近現代の定位不全

## 〈近代的定位第五回：農村問題とグスコーブドリ〉

(講義13～15)

### 第五回参考文献

※カール・マルクス『資本論』第一巻(原書初版は1867年)

※ハーバート・ノーマン『日本における近代国家の成立』(原書初版は1940年～)

※宮沢賢治『春と修羅』第三集(1925～28年)

※宮沢賢治『グスコーブドリの伝記』(1932年発表)

※宮沢賢治『ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記』(1922年頃)

※宮沢賢治『風の又三郎』(1934年発表)

※宮沢賢治『風野又三郎』(1924年以前)

※宮沢賢治『春と修羅』第一集(1924年)

※宮沢賢治『春と修羅』第四集(詩稿遺稿)

マルクスの『資本論』第一巻は、1867年9月に刊行された。日本では翌月の大政奉還、そして年末の王政復古に向けての準備が大詰めを迎えつつあった時期である。その中に次のような日本関係の記述がある。

〈ヨーロッパによって強制された外国貿易が、日本で現物地代から貨幣地代への転化を伴うならば、日本の模範的な農業もそれでおしまいである。この農業の窮屈な経済的存立条件は解消するであろう。〉(カール・マルクス『資本論』第一巻第一篇第三章〈貨幣または商品流通〉、1-183p)

この部分は、貨幣流通が資本への転化を始める寸前の〈支払い手段〉を論じているあたりで、「窮屈な経済的存立条件」とは、資本蓄積にとっての窮屈さを意味している。それまで商品流通に限定されていた貨幣経済は、支払い手段の貨幣化によって、自然にその流通の範囲を超えて資本蓄積へと至る。このメカニズムが働き始めることが、資本主義開始の条件となる。これがつまりは地租改正の力学であり、明治政府はそれによって農業収穫物の徹底した商品化と、租税の「支払い手段」の統一を果たすことになる。それは農業国であった明治初年度の日本にとっては、もちろん「富国強兵」のための第一段階、安定した租税収入を意味していた。

国家形成と租税システムの完備は不可分の関係にあるが、この租税の貨幣支払い化は、近代によってようやく完成されたもので、その完成により、農民の収奪がシステム化されることになる。マルクスは該博な世界史の知識を活用して、この過程をマクロに概観している。

〈商品生産がある程度の水準と広さに達すれば、支払い手段としての貨幣の機能は商品流通の局面を越える。貨幣は契約の一般的商品となる。地代や租税などは、現物納付から貨幣支払いに変わる。この変化がどんなに生産過程の総形態によって制約されているかを示すものは、たとえば、すべての貢租を貨幣で取り立てようとするローマ帝国の試みが二度も失敗したことである。……ルイ十四世治下のフランス農民のひどい窮乏は、ただ税率の高さだけによるものではなく、現物租税から貨幣租税への転化のせいでもあった。〉（同上、183p）

地租の貨幣納付化は、たとえ封建時代と同じ税率が守られたとしても、農産物の商品化ということだけで、すでに農民に多大の追加負担を強いるものだった。興味深いのは、絶対主義王制のモデルの一つであるルイ十四世治下のフランスにおいても、明治絶対制（有司専制による天皇集権制）と同じ力学が働いていたことが、この税法の転換から明確に窺えることである。そしてそれは（ヨーロッパとして）それほど昔ではない。絶対王権そのものがその転換を行った主体であるということ、この事実は明治の体制創出のパラレルがどこいらにあったかを示す、有力なメルクマールであると思う。

これに対して、封建日本も含めて、アジア的な統治は農本的であり、また現物納付を基本としていた。その場合、生産関係（収奪のシステム、たとえば税制）は、生産様式に再度反照して、生産体制そのものを前近代的水準に（よくもわるくも）保ち続ける。これはマルクスの十八番とも言える、下部構造と上部構造の弁証法のあてはまるモデルケースの一つだが、地租改正以降、近代的税制にもかかわらず、農村に入れ子状に残存することになる、小作農業の旧態依然たる〈生産様式〉の、その前近代性の持続の背景にあるメカニズムをも解明してくれているので、ここでいま一度、確認しておきたい。

〈アジアでは同時に国家租税の重要な要素でもある地代の現物形態が、自然関係と同じ不変性をもって再生産される生産関係に基づいている。そしてこの支払い形態は、一方で、また反作用的に古い生産関係を維持するのである。それはたとえばトルコ帝国の自己保存の秘密の一つをなしている。〉（同上）

ここでマルクスは、日本の開国が、貨幣経済と資本主義の侵入路となり、それに対応する日本の政権も（どのようなものであれ）、この過程にたいする応答として、貨幣経済への第一歩を租税の貨幣支払い化（つまり地租金納化）によって行わざるをえないことを直感している。マルクスが資本論の草稿に取りかかったのは、だいたい63年頃からといわれているから、たしかにもう通商条約は結ばれ（1856年、日米修好通商条約締結）、開港が進み、最初の物価騰貴の波が押し寄せているころでもあった。

戊辰戦争の軍費すら持っていなかった新政府は、三井家とはじめとする豪商のサポートにより、ようやく統一国家へと辿り着く。すぐに政府運営の財源が問題となるわけだが、それ以前に、貨幣制度そのものの混乱は壊滅的だった。幕府が貨幣を乱発しただけでなく、それぞれの藩が〈藩札〉を発行する慣習法的権利を有していたからである。藩だけではなく、小金を蓄えた旗本、寺社、宮家すら、そうした信用のはっきりしない紙幣を適宜発行していた。ためにこの信用がひとたび疑問に付されると、紙幣は紙くずとなり、取り付け騒ぎから一揆までの騒動が起きることになる。幕末に流通していた紙幣、貨幣はなんと1600種以上だったという記録もあるくらいだから（ノーマンが参照した史料による）、その混乱ぶりがこの一事からだけでも推察できるだろう。

貨幣制度はなんとか統一に向かう。そしていよいよ国家の定収入である租税収入が問題となる。こうして明治六年の地租改正が行われた。地租であるから、今風に言うと固定資産税であり（実際に戦後まで残存した地租制度はまず地方税に編入され、最終的に固定資産税へと変貌した）、土地の評価額、つまり地価を長期的に固定した上で、そこに掛けられる金納税であった。最初の三パーセントの税率は、封建時代の現物租税の平均、四公六民（四割が「お上」、六割が農民）をほぼ機械的に踏襲し、貨幣換算したものだったが、実質は重税化につながった。収穫時には供給過剰気味になる米価は下落し、それを売って金銭化することは、現物納入の場合の十俵あたり四俵では効かなくなる。これはすぐ理解できる。そればかりでなく、農業投資の時期には種籾、肥料、農具に対する需要が集中して、今度は価格が上がり気味になる。この落差が年々常態化していくわけだから、それだけでも大変であった。ノーマンはこうまとめている。

〈相対的自給自足の立場から市場依存の立場に押しやられた小農民は、収穫がすむとすぐに米を売ることを強制され、したがって価格変動から起るあらゆる危険にさらされた。〉  
（ハーバート・ノーマン『日本における近代国家の成立』第五章〈土地改革とその社会的帰結〉、222p）

この商品化された米穀と金納の連結により、農民はいやおうなしに貨幣経済、そして資本主義経済に巻き込まれる。後にみるように農業恐慌の原因の半ばは、冷夏や津波であったが、残りの半分はまさにこの〈価格変動〉であった。米価下落時に金納を強制された農民は、高利貸しに頼らざるをえなくなる。その場合、〈四公六民〉の封建期には、入会地の共同利用や、慣習的な〈おめこぼし〉また、五人組的組織のポジティブな面としての連帯責任による相互扶助等により、いわゆるセーフティ・ネットもそれなりに発達していた。このネットが〈土地私有の公認〉により、一気に抹消されてしまった。入会地の多くは官有地、官有林に化け変わる（『夜明け前』の青山半蔵の維新後の没落も、この官有林の私有化運動の失敗と関係していた）。そのようにして、孤立した小農は、一気に資本主義の嵐にさらされることになる。長い坂道を下る没落が常態化していった。

〈わずかな自作をおこなう小土地所有者の地位は極度に不安定であり、あらゆる自然的転変（凶作、暴風雨、旱魃）と社会的変動（米価の変動）にさらされ、しかも年々政府に

一定の税金を納入する義務をまぬかれることができない。これに対処するためには、小農は苦勞して百姓をすることを断念するか、わずかな地所を売り払うか、あるいは村の高利貸しから借金し、そうしていつ何時抵当流れになるかもしれない借金返済の長い坂道を歩いていくほかなかった。) (同上、221p)

こうして地租改正は、ほぼ必然のメカニズムに従って、小農の没落を招いた。小農は小作農へと転化する。勝ち組は地主と高利貸しであり、この両者は多くの場合一体化していた。地主の代表としての名主は、江戸期から高利貸しを兼ねることが常態であったからである。

〈同じ価格変動の影響でも米を倉庫に貯蔵しておける立場にある大地主にとっては事情は同じではなかった。……小作人はどうかといえば、相変わらず大部分物納で地主に小作料を納めていた。地主は地租として政府に納入する額を差し引き、残りを純益として懐に入れていた。こうして地租改正は、農民の土地収奪とそれに伴う地主階級への土地の集中というすでに不可避的になっていた傾向に拍車をかける機能を演じた。〉 (同上、222p)

この明治初年度の弱肉強食には、実は前史がある。この時期地主は、すでに自家用の倉庫を持ち、小金を貯め込んで高利貸しを兼業しているわけだが、その前身は、江戸の中期以降に全国に出現した〈新興地主〉だった。江戸期は封建制であるから、もちろん土地私有は原則認められておらず、土地の所有者は〈お上〉である。この原則が新田開発、開墾の場合にはあやふやになる。そこに資金力のある富農や、場合によっては商人が割り込んできて、半ば私有の田畑を増やす。彼らは没落していく自作農の土地を併呑しながら、自作農を傘下におさめ、小作化していった。この江戸期の新興地主層は、やがて〈天保老人〉と言われた、明治前半期を主導する公人たちの一部となり、たとえば〈地主民権〉の当事者になったりする(代表は田中正造)。

この封建から明治にまたがる新しいタイプの(様々な意味で進取の気象に富んだ)地主層をどう評価し、それを近代国家建設の総過程にどこに位置づけるかということは、本質的な問題であり、また激しい論争を生むことにもなった。代表はマルクス主義社会学の講座派と労農派の間で繰り広げられた論争で、前者を代表する服部之総は、新興地主を封建権力に含め、土屋喬雄はブルジョワジーの先駆と評価する。おそらく真実は、ちょうどこの中間あたりにあって、むしろ個々人の主体性が決定要因(進歩か反動かの)ではなかったかとわたしは感じているのが、この問題は維新が革命であったか否か、たんなる政治変革はなかったのかという、日本近代の出発点の位置づけと本質連関する。ともかくそれが、日本近代史の中核の問題の一つであるということだけ、いまここで確認しておきたい。

しかしさらに本質的な問題が根底に介在している。それは、農民問題、農村問題であると思う。そしてまたこの根本の問題は、前節で見た、〈速度〉の要因と確実に連鎖している。つまり明治初年度の政府が金納租税を急いだことも、結局は〈富国強兵〉のタイムリミットと連動していた。政府上層部は、この地租が減税ではなくむしろ重税化であること

を認識しながら、なお〈非常時〉の論理で正当化していた。実際に地租一揆が頻発すると、すぐに六分の一の減税を行う（三パーセントから二、五パーセントへの切り下げ）という機敏さを見せたのだった。

一般に貨幣経済が前近代的な農村に流れこむ場合、それは短期的に壊滅的な結果をもたらす。古い農業は終わり、浮動した農民は失業者として都市に流れこみ、寡占化が進む農業は新しい資本主義的な大経営へと移行する。この過程が典型的に見られたのが、十八世紀半ばにイギリスで起きた〈エンクロージャ（囲い込み）〉の運動だった。それは農業の近代化と、余剰労働力の肥大を生み、工場制産業革命の基礎を造っていく。

しかし日本はそうならなかった。地租改正後に農村の人口は減らなかったし、都市への流入も目立った形では起こっていない。農民は土地にしばられ、ますます零細化していく。この過程のシテとなったのは、ただ一つ、小作料の異常な高さだった。全収穫物の六割が標準であり、これは農業近代化以降のイギリスの小作料のなんと七倍、まだ近代化が遅れたドイツですら日本の三分の一より軽かった（ノーマンの統計による）。

この結果として、日本の小作は、前近代的な生産様式にとどまり続けた。ここでは上に引用したマルクスの直感がまったく正しかったことが証明されている。小作から地主への納付だけは現物が主体である。したがって小作農はその意味では資本主義と商品流通からはワンクッション置かれていた。しかしそれは保護ではない。封建時代以上の現物納付を強いられ、しかも商品流通から遠ざけられることで、まさに半農奴的な地位がそのまま固定されてしまったのである。

小作料の異常な高さは、否定的な連鎖反応を生んだ。それは高利資本が農村を離れることを抑止し（農村の高利貸しで十分に利潤があがるので、わざわざ産業資本へ転化する必要を感じなかった）、地主の寄生地主化を促進した。その結果、農村ではつねに労働人口が過剰となり、産業革命が始まると、その過剰人口が労働者に転化することなく、出稼ぎや一時労働（女工が代表）という中間形態をとることによって、都市労働の水準（端的に労賃）を不断に引き下げるといった機能を果たした。

これがノーマンが近代研究の後半部分で精査した、日本の農村問題のメカニズムである。ノーマンはそれを、近代国家のゆがみの最大のものとして挙げているが、わたしもその通りではないかと感じる。そしてこのゆがみを結局自浄努力によって根本から是正できなかったことが、やはり明治憲法と立憲体制の破綻の根底の原因ではないかと思うのである。

この面では、日本国憲法が果たした、最大の〈自浄〉は、あきらかに農地改革であった。それは戦後の経済の激変と連動はしていたが、GHQの行った最大の改革であり、そして基本的に（いくつかのゆがみは残したが）成功した改革だったと思う。ノーマンもその改革のブレーンの一人であったから、おそらく『日本における近代国家の成立』のこの部分が大きく生かされたのだと考えていいだろう。

しかし再び連続性ということ、二つの立憲体制の連続の可能性ということで考えるならば、小作争議、そして労農党の運動が、土地耕作権（したがって小作の実質の権利）の法定の直前まで行ったことは、やはり大きく評価するべきではないかと思う。つまりここでは、民権運動と有司専制の対抗から明治憲法という妥協が見いだされたのと等質の、自主

的、主体的な是正の努力は、少なくとも確認できるのである。だからこそまた、農民詩人、賢治は、その短い運動の高揚期にこううたうことができたのだった。

〈きみたちがみんな労農党になつてから  
それからほんとおれの仕事ははじまるのだ……〉  
(宮沢賢治『春と修羅第三集』〈作品第一〇一六番〉)

第三集は、一九二六年の詩が中心であるから、まさに最初の労農党の旗揚げと重なっている(結党してすぐ禁止され、第二、第三の結党の試みへと挫折へと連続した)。労農党と小作法の挫折については、管見ではあるが、あまりまとまった研究を見たことがない。それは、左翼運動、社会主義運動の全体のなかでは、失敗した運動のエピソードの一つとして片付けられてしまうことが多いように感じる。その一つの原因は、国際社会主義、つまり当時のスターリニズムによって牛耳られたコミンテルンが、まさに富農(クラーク)弾圧を始めるにあたり、国際的に農民労働党の結成を〈禁止〉(!)したことと連動している。実際に、この布告を忠実に守った日本共産党は、労農運動を、少なくとも農民主体の改革政党としては、切り捨てる方向に向かった。結成のエネルギーが存在していたことは、二度の禁止にかかわらず再組織された新・労農党のそれなりの活躍を見てもわかるが(全国選挙への参加と当選)、それは左翼運動の主流からはずれ、そのまま運動は立ち消えになってしまった。小作法は懸案のまま、可決されず終戦を迎えることになる。

これはまことに悲しい歴史だが、この悲しさのなかに、唯一救いの光があるとすれば、ともかく日本近代の宿痾の根源がどこにあるかを認めた社会的良心が徐々に育ち、法治の枠を使って、自浄に乗りだそうとしていたという、主体性の記録ではないかと思う。彼等の成長のあとは、小作争議の第一波が小作料をめぐるにたいして、第二波、第三波は、小作権を耕作権として保障する(その意味で自作農化し、寄生地主の権利を縮小する)方向に向かっていたことによく現れている。そしてそれは、法治の枠内で行われた自浄の試みであるという意味において、2. 26の青年将校たち、北一輝たちのめざした超法規的、すなわち法治破壊的な〈日本改造〉のおそらく対極にあるものだった。労農運動は、クーデタ派とほぼ同じ問題を見すえつつも、いまだに憲政の可能性を信じて行動している。したがってこの自助努力は、われわれの模索している二つの日本の連続性の探査にとって、やはり大きな光をなげかけていると思う。

そしてその一つとなった(一つとなるべき)近現代の光の中に、農民詩人、賢治もいる。近代日本の全体像の把握にとって、農村から近代を見つめた賢治のその独特の眼差しの意味は、本質的であると思う。

日本の農村問題が先鋭化したのは、いわゆる昭和農業恐慌(ピークは1930~31年)においてだった。その背景には東北の凶作(1931年、1934年)があり、これに昭和三陸津波(1933年)が加わる。賢治のイーハトーブ(岩手)は、まさにこの天災、人災のただなかにあった。「ヒデリノトキハ ナミダヲナガシ サムサノナツハ オロオロアルキ」(〈雨ニモマケズ〉)という早魃冷夏の中、一つの作品が発表された。『グスコープドリの伝記』(1932年『児童文学』に掲載)がそれである。

主人公のブドリが七歳、妹のネリが五歳になったとき、イーハトーブは凶作に見舞われる。冷夏で〈オリザ〉(米)がまったくできない。大変なさわぎになった。翌年にも冷夏は続き、とうとう飢饉が始まる。両親は二人を救おうとして、森には行って死ぬ。生き残った兄妹が、両親の残した穀物の粉でかろうじて飢えをしのいで生き延びていた時、「この地方の飢饉を助けに来た」と自称する「籠をしょった目つきの鋭い男」がふらりとやってきて、餅を与える。男は「町に行けば、毎日パンが食べられる」と言いながら、突然ネリをさらって籠に入れ、逃げ出す。ブドリはあわてて追いかけるが、男は「風のように」逃げ、ブドリは森の中で倒れてしまう。

起き上がると森は一変している。もう飢饉は終わり、木々の上では「てぐす」というものが飼われて、子供たちがその上に登って、「てぐす」から出る空中の糸を取るかわりに食べ物をもらっている。ブドリの家はいつのまにか「イーハトーブてぐす工場」に変わってしまっていた。ブドリはそこで働いて生き延びるが、最後に地震と噴火が始まり、てぐす工場は閉鎖され、ブドリは町に向かって歩きはじめる。

冒頭部分をこうして要約してみると、発表の時期と呼応して（それは賢治の死の前年である）、東北の凶作と飢饉、そして農業恐慌をそのままファンタジーの素材としたような印象を持つ。これはしかしそうではなかった。まずこの作品には草稿があり（『ペンネンネンネン・ネネムの伝記』）、それは大正十一年（1922年）頃には清書されていたことが確認されている（筑摩版全集の解説による）。それは『グスコブドリ』発表のちょうど十年前であり、そのころ東北の農業は明治後半の凶作から徐々に回復基調にあったらしいから、ここでの冷夏、凶作、農村の崩壊は、常態化した構造的な危機を背景としていえるべきではないかと思う。その一つの証左は、「てぐす」が、あきらかに養蚕の副業をモデルにしていることで、この生糸産業が恐慌に打たれて暴落し、農村の現金収入の道が枯渇したことが、農業恐慌の引き金の一つであったからである。したがって、恐慌をストレートにモデルとしたのなら、「てぐす」は登場しえないが、それはそのままになっている。

賢治の見るイーハトーブの飢饉は、より根本的な位相で、日本の農村の崩壊をモデル化しているように感じる。つまりそれは、資本の農村への進出と不可分の関係にあるからである。もう一言言えば、「てぐす工場」の金主は、おそらく地元の高利資本で、これもよくある連結であった。そしてもちろん賢治の父が経営する「宮沢商会」の実体は、小作経営を行う高利資本（呉服中心の質屋）である。地主から高利資本に進出したのではなく、高利資本の回転がうまく行き始めてから、地主を兼業したという経路は、通常の発展の逆の形だが、できあがった経営形態は、オーソドックスに寄生地主のパターンを踏襲していた。したがってそこから醸し出される搾取の連鎖は、賢治の自己定位の大きな問題として意識され続けることになる。

この葛藤の一つの解決は、父政次郎（まさじろう）と共有する法華経信仰だった。政次郎は、民生委員を長くつとめ、地元では社会的葛藤のフィクサーのような立場にいた名士で、それなりに「実業」とのエートスのバランスはとれていた（と本人が自覚していたことはまちがいない）。しかし「三井三菱にもなれたかもしれない」という大言壮語も残し

ていることからして、その実業の実体が日本近代の宿痾に連結されているという自覚は薄かったと感じる（ここにも一つの世代差の断絶を認めることができるかもしれない）。

賢治のもう一つの自己バランスは、近代科学、そしてそこから実学として派生する農学だった。それはこの『グスコーブドリ』において縦横に展開されている（しかしまたその核心部には菩薩の〈捨身施虎〉的な絶対利他の情念が置かれる）。

繰り返すと、『グスコーブドリ』の発表時に、賢治は東北の農業恐慌のただ中にいたわけだが、〈てぐす〉のモチーフ、つまり恐慌で崩壊しつつあった農村副業のモチーフは変更していない。『ペンネン……』にもすでにそのモチーフは、空中に生える〈昆布〉とりとして、埋め込まれており、総じて凶作、飢饉、身売り（ネリの誘拐）、そして養蚕の工業化の枠はそのまま変更なく使われている。しかし完成作において、ブドリの農業工学ファンタジーと地震工学ファンタジーは大きく展開し、草稿を離れることになった。最後の菩薩死のモチーフも新たに加わったものである。したがってこの最終形態においては、イーハトーブとブドリの理念性、超時間性のようなものが顕在化し、それが結局、〈農村問題〉に仏典説話的な菩薩死の昇華をもたらす、シンタクスの枠を提供していると見ることができる。

これに対して、十年前の草稿、『ペンネン……』（やや疚しさをもって省略させてもらうが）の方は、まず破天荒と言えるくらいにファンタジー性が強い。それはばけもの国の話であり、そのハンムンムンムンムン・ムムネ市をを行き交うばけものは、「通り過ぎ通りかかり、行きあい行き過ぎ、発生し消滅し、聯合し融合し、再現し進行する」という、どうも「見事な」ありさまとしかいいようがないのだが……そのばけもの国はなぜかいま近代化の真っ最中であり、工場の煙突からは、「黒、白、青、無色」の煙がもくもくとあがっている（そればかりではなく、インテリばけものは、カントやニーチェすら読み始めている！）。

この近代化をめぐる、ファンタジーは現実の制度と向き合うことになる。たとえば主人公のネネムは〈ばけもの世界裁判長〉になって、ばけものが犯してはならない〈出現罪〉（ふらっと人間世界にあらわれてこわがらせること）を中心にさばくのだが、それはどうやら近代化された「独立した」司法であるらしいことが、さりげなく暗示されていたりする。たとえば裁判長の外に世界長というのがいて、それは「中生代の<sup>めいろう</sup>珊瑚木」がへあがった精霊なのだが、ネネムの裁判が評判になると、「しっかりやってくれ」と激励し、勲章を贈るものの、その裁判内容にはまったく介入しない（司法の行政からの独立！）。

この楽しいファンタジーはしかし、ある事件をめぐる、日本近代の根幹の問題と向き合うことになる。

事の起こりは「フクジロ印のマッチ」という妙な代物だった。鳴り物入りの車が向こうからやってきて、車の上には、子供のような老人のようなフクジロという名前の「いやなもの」が陣取っている。商店街に来ると、その子はマッチを手にもって飛び降り、一箱一銭のマッチを十円で押し売りする。買わないと店頭でいやな踊りをするというので、みな嫌々買うしかない。町を巡視していたネネムが、これはけしからんと巡査に合図してフクジロを捕らえると、老人のような子供のようなばけものは、泣き出して自分は被害者だ、親方に虐待されていて、売らないとひどいめにあうのだと訴える。親方はではどこに居る



のだと聞くと、さっきの車の上だと言う。たしかにそこには「黒い硬いばけもの」がいて、ぼかんとした顔をしている。捕らえて問いただすと、自分は一日働きづめで食べるのがやっとだ、あがりば親方がみんな持って行ってしまおうという。その親方はどこだと問いただすと、あそこで自分を監視していると言う。たしかに曲がり角にそれらしい化け物がいる。その化け物も食うや食わずで.....

というふうに、鎖の環は広がっていき、ついにずらっと三十人のばけものが捕らえられる。最後に「緑色のたいへんにハイカラな化け物」が捕まると、ネネムはこれが張本人だろうと思うのだが.....そうではない。ハイカラばけものは、自分が監視している二十九番目のばけものに百二十年前に9円貸した、それが今五千円になっている、その日歩を三十円ずつとるために、ずっとつけて歩いていると言う。するとその二十九番目の化け物も、二十八番目の化け物に貸しがあり、それがいま大変な金額になっているので、その日歩をとるために一日監視していると言う。以下同で、フクジロのマッチ売りもこの日歩とりたての一環らしいということがわかる。ネネムは、これは「じゅんぐりに悪いことがたまってきている」ことを悟って、判決を言い渡す。

「百年も二百年も前に貸した金の利息を、そんなハイカラななりをして、毎日ついてあるいてとるといふことは、けしからん。殊にそれが三十人も続いてゐるといふのは、実にいけないことだ。おまへたちはあくびをしたりぬねむりをしたりしながら毎日を暮して食事の時間だけはすぐ近くお料理やにはひる、それから急いで出て来て前の者がまだあまり遠くに行つてゐないのを見てやっと安心するなんといふ実にどうも不届きだ。それからおれがまうけるんじゃないと云ふので、悪いことをぐんぐんやるのもあまりよくない。だからみんな悪い。みんなを罪にしなければならぬ。けれどもそれではあんまりかあいさうだから、どうだ、みんな一ぺんに今の仕事をやめてしまへ。」

(宮沢賢治『ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記』、5-300p)

ネネムは、フクジロを張り子のトラを造る工場に送って、そこで仕事のあいまにお菓子を食べられるようにしてあげる。めでたし、めでたし.....だが.....

この高利貸しの連鎖が、質屋を営業する「宮沢商会」の実態から、賢治が夢想した、日本帝国の中核にある搾取状況、その連鎖であることは間違いない。最も本質的なモメントは、それが連鎖であって、みんなこの機構に巻き込まれているということではないかと思う。そしてたしかに、資本主義における資本の回転とは、その一場面一場面で、こうした「小口の」搾取を伴うものだった。それが長く連鎖すると、一銭のマッチを十円で押し売りするような、「いやなもの」が登場しかねない。

この「いやなもの」だが、その正体はおそらく、封建的な暴力機構の突端部に出没した「ごまのはい」の類ではないかと思う。たとえば明治期になって成立した、三遊亭円朝の出世物語『塩原太助』の舞台は江戸中期であり、そこではあらゆるプロットに暴力的なモブ、ごまのはいが登場して因縁譚を結び合わせる触媒のような役目をする。まさにぐるつと因果は廻っているのである。彼等の得意技の一つは、商家の軒先で「ごねる」、つまり

その筋のものであることをにおわせながら居直ることだった。商家はそういう時、「奥へ」とさりげなく言って、奥に招き入れそこでなにがしかの「お茶代」を渡すのである。

これはまことに「いやな話」だが、近代がすでに佳境を迎えた日本の、その高利資本の回転の突端部に、そうした馴染みの封建暴力機構（のごときもの）を置いたのは、賢治の直感の芽えをしめしているとわたしは感じる。つまり実際に、「右翼ゴロ」の企業恫喝が家常茶飯化するの、ちょうどこの頃であり、たとえばその中からあの血盟団事件（1932年）のような不条理な暗殺事件も起きていたことを考えると、フクジロは面白いのだが、冗談ではすまされないという気持ちにもなってしまう。やはり「おまえたち、みんな一ぺんにやめてしまえ」と言うしかないのだろう。

賢治のこの高利資本連鎖の、ファンタジー的批判は、農村、農民がごく身近であった、そして農業の近代化にライフワークの一つを見いだした彼ならではのものだと思う。それはファンタジーでありながら、核心をついており、そして「左翼」の分析にみられる教条性が一切ない。ずばりと本質をつきながら、大同的、大乘的に優しい（フクジロ君ですら、お菓子つきの仕事にありつく）。こうした賢治独特の近代観、世界観の根底に、いったい何があったのか、そしてこの懐かしい優しさ、それが日本近代の酷薄さ（たとえば高利資本の回転、たとえば右翼ゴロの暴力的跋扈）と、どのように向き合っていたのか、向き合っていたのかを最後に考えておきたい。

イーハトーブの農村とその困窮をテーマとした『グスコブドリの伝記』は、ばけもの国のやはり飢饉と身売りを冒頭とする『ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記』の再話改作であって、そこではファンタジーがより現実に近い形になっていることがわかる。同じタイプの改作が観察されるのは、やはり代表作の一つ『風の又三郎』の場合で、没後に発表されたこの作品（1934年発表）は、31年から33年頃に執筆されたことが確認されているのだが、やはりそれより十年ほど前によりファンタジー的な草稿がすでに仕上げられていた。『風野又三郎』（1924年以前に成立）がそれである。

この場合、発表作の面白さの一つは、転校生が風の精かもしれないと同級生が感じることである。それが最初の草稿では、ストレートに風の精であり、彼の世界中を廻る「風の大循環」がほとんどSFファンタジー的な展開を見せている。この構想は、ほぼすべて、完成作（発表作）では捨象されている。では改作はファンタジーの現実化、学校童話化かという、どうやらそうではない。風という四大の力は、発表作の方でも縦横に展開されているからである。そしてそれは、冒頭の詩から発散される、「とうめいな」力でもある。

〈どっどど どどうど どどうど どどう、  
青いくるみも吹きとばせ  
すっばいくわりんもふきとばせ  
どっどど どどうど どどうど どどう〉（同上、『風の又三郎』）

これは風の精本人、あるいは風の精が吹き抜ける様をはやす子供たちの歌声である。それが〈風の大循環〉の張本、風野又三郎では、こういう出だしになる。

〈どっどどどどうど どどうど どどう、  
ああまいざくろもふきとばせ  
すっばいざくろもふきとばせ  
どっどどどどうど どどうど どどう〉(同上、『風野又三郎』)

これははっきりと、風の精が夢中に吹き抜ける時に歌う歌である。作品中で又三郎はこの歌を友だちの小学生に教えているのだが、それは歌ってみてもすぐわかる。分ち書きがあるかないか、そこで息をつぐかどうかで、〈没頭〉の度合いが違ってくる。分ち書きがないこちらは、夢中で吹きまくる風の歌である。

では現実との距離はどうだろうか。これは〈制度語彙〉をチェックすると分かると思う。

气象台や大学が出てくるのがファンタジーの方で、これは〈風の大循環〉のSFに科学的枠組を与える。それは思いの外〈リアル〉なものである。それに対して、学校童話には巡査と専売局の役人が登場するが、それが子供たちの定位世界では独特に屈折する。又三郎は遊びに行く途中、何気なくたばこ畑の葉っぱを一枚摘み取ってしまう。すると仲間の一人が、専売局に見つかったら大変なことになるとはやす。はやしながらでも、子供たち自身も不安になる。それからちょっとしたいさかいがあるのだが、実際にこの専売局の役人が現れると、子供たちは、又三郎が見えなくなるように、さりげなく環を造って守る。

子供たちはその前に、禁止されている〈発破かけ〉(水中で爆発物を破裂させてショックで浮き上がった魚を手取にする)を目撃して、下流で待ち伏せし、そこに浮いた魚を捕らえ、いけすにして囲ってあった。役人がそれに気づいて、いけすをこわしはじめると、子供たちは怒ってこうはやす。

〈あんまり川を濁すなよ、  
いつでも先生<sup>せんせい</sup>云ふではないか。〉  
(同上、『風の又三郎』、342p)

これは表面の言葉のさりげなさに反して、かなり屈折した定位履歴のようなものが混入している。つまり子供たちの世界における、制度の浸潤の程度と、学校教育、特に修身方面のそれが、奇妙なねじれを起こしている。それを賢治はこちらのヴァージョン、リアリズムの発表作品の方でモチーフ化した。わかるように、これもねじれである。『グスコーブドリ』の場合は、高利資本の「いやな」回転は、ばけもの国に登場する。制度批判の視座そのものが(冒頭の飢饉のストーリーが一段落してからは)、『グスコーブドリ』の方には希薄で、むしろ工学系の制度に対する讚美の念が通奏低音のように響いている。

制度語彙の作品世界への侵入、浸潤という面から賢治童話を検討した場合、いつもそこにある種の保留、屈折が介在していることに気づかされる。これは特に近代化をになう近代教育について顕著であり、たとえばこういう詩句がある。

〈これからの本当の勉強はねえ  
テニスをしながら商売の先生から

義理で教わることではないんだ) (『春と修羅』第三集〈稲作挿話〉、231p)

では本当の勉強は何に支えられるのか。それはこの詩の最後に示されている。

〈……雲からも風からも  
透明な力が  
そのこどもに  
うつれ……〉 (同上)

つまり? 〈どっどど どどうど どどうど どどう〉の、純粋なエネルギーであると思う。子供たちが風の又三郎、または風野又三郎から学ぶことのほうが、本当の勉強であり、世界に生きる自分の位置を教えてくれる。そしておそらく……専売局の役人がせっかくだくったいけすをこわしたら、「あんまり川を濁すなよ いつでも先生云ふではないか」と皮肉にはやすことも、ついでに教わる。

『グスコブドリ』と『風の又三郎』を完成させた、草稿から改作までの二つのパターンを比較して確認できることは、この「四大の教え」の互換性である。つまりそれは、ファンタジーであるから、そこに近代日本の本質をファルス化して示す、その舞台ともなるし、また学校童話としてのリアルなニュアンスの中で、子供のところに投影した制度圧を四大の力によって異化する、そういうことも可能となる。

ではこの自由闊達な互換性、ファンタジーと現実の互換性の根拠は何なのだろうか。わたしはそれは、アニミズム的心性の習合性ではないかと思う。

賢治には、ストレートにアニミズム的心性を表出する詩句があちこちに見られる。たとえば次のような印象的な自己同定 (脱自的自定)。

〈何と言はれても  
わたしはひかる水玉  
つめたい雫  
すきとほつた雨つぶを  
枝いつばいにみてた  
若い山ぐみの木なのである〉

(同上、『春と修羅』第三集、〈作品第一〇五四番〉、222p)

このアニミズム的情念は、定位習合の原動力となる。これが賢治特有のものか、あるいはこの時代の日本人に固有なものか、あるいはさらに……われわれの裡に眠る縄文以来の、あるいはそれをも遡る太古の基底的心性の発現なのか、ここでは決める必要はない。ともかくそういう心性が、こういうすきとおった詩句を残し、そしてそれをわれわれがなぜか懐かしく理解している、この定位の出会いの事実が大切であると思う。

このアニミズム的心性は、ともかくあらゆる定位型の習合の原理であった。エネルギーシユな儀礼の場では、生き物が溶融し、銀河が臨在する。

〈アンドロメダもかがりにゆすれ  
青い仮面<sup>めん</sup>このこけおどし  
太刀を浴びてはいつぶかぶ  
夜風の底の蜘蛛をどり  
胃袋はいてぎつたぎた  
dah-dah-dah-dah-dah-sko-dah-dah.....〉  
（『春と修羅』第一集〈原體劍舞連<sup>ほんたいけんばいれん</sup>〉、55p）

四大の力が降臨するのは、儀礼の場であり、また現実の場である。その現実の場は、近代日本の農村においては、貧窮、貧困と一体化していた。そこで四大は、貧困を裡側から輝かせる莊嚴となる。

〈わたしたちは、氷砂糖をほしくらゐもたないでも、きれいにすいとほつと風をたべ、桃いろのうつくしい朝の日光をのむことができます。  
またわたしは、はたけや森の中で、ひどいぼろぼろのきものが、いちばんすばらしいびろうどや羅紗や、宝石いりのきものに、かはってゐるのをたびたび見ました。〉  
（同上、『注文の多い料理店』〈序〉15p）

すきとおった四大は、四大のすきとおった物語を生む。それを賢治は聞いて語り、わたしたちのこころへと届ける。

〈わたしは、これらのちひさなものがたりの幾きれかが、おしまひ、あなたのすきとほつたほんたうのたべものになることを、どんなにねがふかわかりません。〉（同上）

このアニミズム的心性から見ると、近代はどう見えるか、たとえばその近代を造っていると豪語する政治家たち。

〈あつちもこつちも  
ひとさわぎおこして  
いつばい呑みたいやつばかりだ  
羊齒の葉と雲  
世界はそんなにつめたくて暗い〉  
（同上、『春と修羅』第三集、〈政治家〉、221p）

地史的な時間が、アニミズム的時空に混入する。それは「羊齒」の連想から始まる。世界を暗くつめたくするやつらが、「ひとりで腐って ひとりで雨に流される」と、あとは「しんとした青い羊齒ばかり」。どこかの透明な地質学者は、「それが人間の石炭紀であった」と記録する。

これがわたしのいう、あらゆる近代を包摂する習合力である。アニミズム的四大の「透明なすきとほった力」が、羊歯と石炭紀の心象を引き寄せると、かびくさく固まった「ひとさわぎばかりおこしていた」政治家が青くしんと静まりかえる。

この順序が重要だと思う。まず透明な地質学者が登場しなければならない。「すきとおったたべもの」を食べて、自分も透明になった、そういう四大と融合した認識主体である。アニミズム的四大が先行し、地質学や農学が自然にそれに続く。そして現代の、近代の醜悪さ、矛盾、葛藤に切り込んでくる。胃袋は「ぎつたぎた」になるかもしれないが、心は透明のままである……それをおそらく賢治は願っている。

賢治は真の教育家であった。それは農学校教員の履歴を持っているからではない。もっと根本的に近代的な、あるいは明治的な公人の精神がそこにははっきりと働いていたと感じる。そして……連関はすでにおわかりだと思うのだが……それは勅語的修身の対極である。なぜならそれは、習合的主体性の涵養をこそ勧めるものであるから。

〈生徒諸君

諸君はこの颯爽たる  
諸君の未来圏から吹いて来る  
透明な清潔な風を感じないのか  
それは一つの送られた光線であり  
決せられた南の風である

諸君はこの時代に強ひられ率ゐられて  
奴隷のやうに忍従することを欲するか

今日の歴史や地史の資料からのみ論ずるならば  
われらの祖先乃至はわれらに至るまで  
すべての信仰や徳性は  
ただ誤解から生じたとさへ見え  
しかも科学はいまだに暗く  
われらに自殺と自棄のみをしか保証せぬ

むしろ諸君よ

更にあらたな正しい時代をつくれ……〉

(同上、『春と修羅』第四集〈生徒諸君に寄せる〉、267 p f f)

新しい時代のコペルニクスが夢想され、「あまりに重苦しい重力の法則からこの銀河系統を解き放つ」ことが求められる。すべての農業労働は、「冷たく透明な解析によって」舞踏の次元にまで高められねばならない。新しい時代のマルクスは、盲目的衝動から動く世界を、「素晴らしく美しい構成」に変えねばならない。新しい時代のダーウィンは、銀

河空間の外にまで至り、「透明に深く正しい地史と 増訂された生物学」を呈示しなければならぬ。

このすばらしい習合力は、すでにわれわれが出会った日本近代の受容能力の特性を十全に示している。つまりそれはポリフォニー的並存と他者性の絶対的是認である。そしてそれはクセノフォビアと他者排斥を本質とする、国体論的修身が夢想だにできなかった、生きた定位の生態系を示すことができた。

その核心部には、四大の力、それと融合するアニミズム的定位のエネルギーがある。それは一つの詩的イデアである。

〈新たな詩人よ

雲から光から風から

透明なエネルギーを得て

人と地球によるべき形を暗示せよ〉(同上)

賢治的心性が一つの奇蹟なら、その核心部をいまだに懐かしく理解できるわれわれという存在もまた一つの奇蹟なのかもしれない。そしてこの相呼応する心性の共鳴は、われわれがたしかに一つの近現代、一つの連続する日本の心性を保持し続けていることの、もっとも明証的な証しではないかと感じる。そしてそれがまた、表層的に分裂して見える二つの日本を、真に、あらたに、一つに媒介する〈どうめいなエネルギー〉になるかもしれないと思う。

それがわたしを、今現在のこの仕事に向かわせた最大の動因であり、また希望である。つまりはわたしもまた、一人の〈生徒〉であるらしいのである。

(第五回テキスト終わり)